



子どもたちが持つ無限の可能性 — 未来を切り拓く教育 — によるまちづくり

図 秘書広報課 ☎049-256-9535

より良い教育、特色ある教育で

進めるまちづくり

市長 STE^スEM^テM^ム教育でご協力いただいている野村泰朗^{たいろう}准教授(写真右から二人目)、個別支援が必要な児童生徒の教育相談でご協力いただいている小栗貴弘准教授(写真一番左)、「いのちの授業」でご協力いただいている中理恵助教(写真一番右)の三方におかれましては、富士見市の教育分野に多大なご協力をくださり誠にありがとうございます。

本日は、本市の特色ある教育にご協力いただいております先生方をお招きし、教育の現状などを伺い、子どもたちの可能性を広げ、子育てしやすく住みよいまちづくりに生かしていきたいと考えておりますので、よろしく願います。

野村 富士見市でSTE^スEM^テM^ム教育の実践を始めて5年目になります。これまでの活動を通して、教育の本来のあり方とは、まちづくりのため、市民の皆さんの生活のためにどのような教育が必要かを考えていくことだと改めて気付かされました。これからの時代に必要なものとしてコンピュータやAIが注目されていま

りごとをどう解決するかを考える必要があります。私は、社会的自立には身近な存在である学生の姿がロールモデルになると考えています。本学の学生たちには子どもの憧れの存在になってほしいと思っております。子どもたちとの関係性のなかで、社会参加につなげていきたいです。富士見市では今年度から学生の派遣を始め、効果が表れてくるのを期待しているところです。

中 私は助産師としての経験を生かし、平成23年の東中学校から始まった「いのちの授業」に携わっています。一年に一度の機会で行う「いのちの授業」では、導入当初から自尊心感情を高めたという目的がありました。それは日ごろ子どもたちと接している先生方が自尊心感情を高める必要性を感じているからこそであり、毎年現場の先生方の声を聞き内容をブラッシュアップし、一緒に作り上げています。私は、子どもたちが将来自分で選び決められる人になってほしいと思っています。自分で自分を認められること、世の中で必要とされている実感があるからこそ、自立につながっていくと考え、自尊心感情の向上に取り組んできました。「いのちの授業」をきっかけに、先生方や保護者の力も借りながら、

すが、先端情報技術を学びながら、地域を知り、未来を考えていくことが重要です。現場の先生方と一緒に考え実践してきたSTE^スEM^テ教育は、今年度から市内小学校すべてで実践することになりました。また児童の腕試し、目標となる場として小学生ロボコン・富士見市大会も開催することができました。これまでの取組みを重ねてきた土壌が少しずつ整ってきたことで、主体性と問題解決力の向上や今後の新たな展開への可能性を感じています。

小栗 個別支援が必要な児童生徒の教育相談や、スチューデントサポーターとして臨床心理学の学生の派遣など、今年度から富士見市の教育に関わらせていただいています。ここ数年は全国的に不登校の子どもが増加しており、昨年度は全国で約30万人に上ります。こうしたなかで文部科学省としては、登校・不登校を問わず、社会的自立を達成することを最終的な目標としています。もちろん不登校の背景にある問題を放置するのではなく、子どもたちの困

り子どもたちの生活を豊かなものにしていきたいと思っています。

市長 市長の役割として、このまちを発展させるため、どのように子育て世代に富士見市を選んでいただくかを考えたときに、子どもたちにより良い教育、特色ある教育を提供する環境を整えることで、富士見市を子育て地に選んでいただけるのではないかと考えました。

初めてSTE^スEM^テM^ム教育の体験会を実施した際には応募が定員の倍を超えるなど反響がとても大きく、現在は全小学校で取り組むところまでできました。また、これまでも不登校への対応に尽力してきましたが、コロナ禍で子どもたちの状況も一変しています。心理学の専門的知見を得ながら、今後も取り組んでいきたいと思っています。そして自尊心感情の向上においても、家族や先生、地域の皆さんに見守られている子どもたちが感じられ、社会とのつながりであるソーシャルキャピタルをつくることに必要だと思っています。

三人の先生をはじめ教育に携わる皆さんが支えてくれる心強さを感じ、子どもたちにより良い教育を提議できるまちづくりを進めていきたいと思っています。



「ロボコンがきっかけでまちを好きになり、このまちを良くしたいという思いが問題解決につながる」

子どもたちの成長の場は

『学校』だけにとどまらない

市長 かねてよりSTEM教育を通じてきたチャレンジ精神の育成を重視されてきた野村先生ですが、小学生ロボコン・富士見市大会は、学校の枠を超えて子どもたちが活躍できる場の一つであったと、大会を通じて感じました。ロボコンを与える子どもたちへの影響をどのようにお考えですか。

野村 現在の情報社会では何でもできるような感覚になっていますが、現実社会には多くの障壁があり、理想どおりにはうまくいかないこともあります。私がSTEM教育においてモノづくり活動を大事にしている理由の一つは、例えば実際に動くロボットを作ることが、実践と改善を繰り返すなかで分かりやすいフィードバックを得るのに適した学習方法だと考えているからです。ロボットが動いたときの喜びや、想定どおりにならないときの試行錯誤などを学校教育の段階でいかに体験してもらうかが重要であると考えています。加えて、根気やこだわり、集中力が必要となるロボット作りやプログラム

ミングでは、従来の教科学習があまり得意ではない子でも輝ける機会になるかもしれません。学校の外に活躍の場を広げてあげること、さまざまな子どもがチャレンジして披露できる場を作りたいと考え、今回のロボコン大会を提案し、実現することができました。

一方、STEM教育は問題解決能力を養うための手段ですが、今の子どもたちは満ち足りていて、まちの人の困りごとをあまりイメージできず、問題を見つけないのが難しいという課題があります。まちを知ることが好きになり、好きな場所を守る、より好きになりたいという思いが問題を発見する意識につながっていくのではないかと現場の先生から伺っています。ロボコンがきっかけでまちを好きになり、富士見市をより良くするために問題を発見する意識の醸成につながればうれしく思います。

市長 ロボコン大会では、想像力豊かなロボットと、子どもたちの自信に満ちた姿を見ることができ、素晴らしい、今後は活動の分析などを行って、より効果的な活動へとブラッシュアップしていきたいと思っています。

市長 コロナ禍で人と人とのつながりやコミュニケーションが薄れてきたなかでも、行政として施策や事業を行う上では、問題解決に向けてコミュニケーション能力が必要であると職員にも常々話をしています。ちよつとした出会いが大きなネットワークにつながることもあり、例えば教育分野では皆さんの力をお借りすることができ、私は人とのつながりに恵まれていてるなど感じています。また、社会とのつながりに触れていただきましたが、長年水害に見舞われ防災に力を入れている地域では、訓練に中学生ボランティアが参加しており、頼りにされています。またここ数年、地域のお祭りなどに子どもたちがボランティアとして参加してくれることも多く、子どもたちが社会やまちの仕組みを知るための良い効果が全市的に広まっていると感じています。

中先生による「いのちの授業」では、出産立ち会いを経験してきた助産師ならではの講話や、実際に赤ちゃんに触れ合う体験などを通じて、命の大切さを学ぶことができる

学校に来れない子どもたちに対する支援としては、小栗先生にご協力いただき、心理学を専攻し、児童の心に寄り添える大学生をチューデントサポーターとして派遣していただき、相談支援を行っています。学校や家庭内だけではない人とのつながりやコミュニケーションの大切さをどのようにお考えですか。

小栗 STEM教育の問題解決能力など、生きる力を学ぶためには参加することが大前提で、不登校の子どもも参加につながるものがスチューデントサポーターの大きな役割だと考えています。学校を好きになってもらうにはどうしたらよいか考えたとき、大学生という子どもたち年齢が近く、身近な存在が関わりを持



らしいと感じました。保護者の皆さんとしては子どもがつまづかないようにと思うことは当然ですが、社会に出れば挫折や思いどおりにいかないこともあります。ロボコンにはトライアンドエラーがたくさん詰まっています、困難を乗り越える成功体験の機会を提供できたのではないかと思っています。また、学校教育では学力面も考える必要があります。学力テストでは直接表れてこないかもしれませんが、チャレンジ精神の育成などにより教育全体の底上げが図られ、ひいては学力としても表れてくるものだと思います。こうした取組みを、すべての子どもたちに提供したいと考えています。

「大学生という身近なロールモデルを通じて、会話や遊びから社会とつながってほしい」





「『生まれてきた自分ってすごいんだ』
—自尊感情を高めて自分を信じる力を
育みたい」

ものになっていきます。子どもたちの自尊感情を高めることについてのどのような考えですか。

中 「いのちの授業」を進めるなかで、「生きること」を伝えるには「亡くなること」も伝えるべきではないかという考え方の転換期があり、授業を考える現場の先生方の苦勞を伺っていました。私には助産師としての経験が見届けなければならなかった経緯があります。そのとき救えない命があることをまざまざと感じ、「たくさんのお母さんと赤ちゃんを救う」という助産師を志したときの想いが打ち砕かれ、助産師になった意味が分からなくなっていました。ちょうどその時期に「いのちの授業」が始まり、救えない命もあることを伝える機会をいただきました。生徒から「みんなが生まれてこられるわけじゃない、生まれてきた自分ってすごいんだ」という感想をもらったとき、あのとき報われなかった自分の気持ちを振り返り、命の大切さを伝える意味を感じました。

市の教育行政方針に「いのちの授業」を掲げていただいたのをきっかけに、市民としても富士見市の役に立てればと、授業を通じた自尊感情

の向上について研究を進めました。男子生徒に若干の自尊感情の向上が見られただけではなく、富士見市の子どもたちは自尊感情の数値が全国平均よりも高く、その背景にはソーシャルキャピタルが関係していることが分かってきました。地域と子どもたちがつながっている富士見市には、自尊感情を育める土壌があることを研究結果も示しています。

市長 中先生にはこれまで長きにわたり富士見市の教育に携わっていただけており、研究では自尊感情に高いという結果もありました。また、富士見市ではソーシャルキャピタルという点でも、子ども食堂や通学時の見守り活動などをはじめ、地域の方々の協力をいただけており、そうした活動が子どもたちの良い成長につながっていることが大変うれしく思います。

私は、子どもたちには元気に育ち夢をつかんでほしいと思っており、それに携われる職にすることは幸せだと感じています。お三方の力を借りることは、学校の先生方の力にもなり、より良い教育の環境を整えていくことができるかと期待して、今後にもさらに邁進してまいります。

子どもたちの 未来を 切り拓くために



市長 最後に、皆さんに改めて子どもたちが持つ無限の可能性を育んでいくための想いを伺います。

野村 小学校でSTEM教育を学んだ子どもたちが中学校に上がったときのステップアップの場づくりにも取り組みたいと思っています。一方で、不登校などの課題に対し、学校ではない学びの場も考える必要があると研究者として思います。学校には行けないけれど、ロボコン大会などに行ってみたいと思える場を提供したいという想いが、ロボコン大会開催のきっかけでもありました。コロナ禍を通じて、オンライン授業をはじめとする学校以外の学びの場が増えたこともあり、家庭や地域での学びをミックスすることによって、子どもたちが成長しやすい場となっていくと思っています。今回の対談を通じて皆さんの試みとつながり、市をより良くしていけると思っています。

小栗 取組みを行うためには「継続」「取組みの関連付け」「効果の可視化」の三つが大事だと考えています。皆さんの活動のように長く続けていきたいと思いますが、そのためには中先生が話された、効果の可視化が重要だと感じています。自尊感情

は不登校の子にとって深く関わってくるものであり、私たちの活動が自尊感情を高めることにつながると考えると、今回、皆さんと関わりを持つことは今後の取組みに大きな意味を持つと感じます。例えば不登校の子がロボコン大会に行ってみることで、新たな出会いがあれば社会的自立につながります。それぞれの取組み同士が関わりを持つことで相乗効果が生まれてくると思います。

中 「いのちの授業」は、子どもたちの状況に合わせたさまざまな配慮が必要で、富士見市の授業では、子どもたちへのフォローは任せてくださいと現場の先生方に言っていたとき、とても心強く感じました。特別支援学級で授業を行ったときには、出生時体重と同じ重さにしたペットボトルを毛布にくるむと、それまで落ち着きがなかった子どもたちが大事そうにずっと抱っこする姿を見ることができ、それぞれに合わせた授業の必要性を実感しました。この対談のつながりを通じて、皆さんの専門的知識もお借りしながら、さらに発展できたらと思います。

市長 富士見市は「みんな笑顔☆ふじみ」の合言葉のもとに、理想の「未来」の実現に向かって取り組んでい



富士見市長
星野 光弘

「子どもたちには元気に育ち、夢をつかんでほしい」



ます。将来を担う子どもたちの可能性を育むためのまちづくりにおいては、皆さんが持つ子どもたちへの想いが今回の対談によって交わり、今後の発展や連携も提案いただきうれしく思います。

対談を通じて得た連携は無限でもあるので、今後も皆さんの力をお借りしながら、富士見市のためによりいっそう力を入れていきます。本日は誠にありがとうございました。

新春対談 終わり

